博士学位論文（要約）

19 世紀末イングランドの基礎学校における宗教教育

－公教育を巡る「世俗化」の社会史的再検討－

D203703　中村好甫

広島大学大学院人間社会科学研究科

2024 年

論文構成

序章　研究の目的と課題設定

第一章　国民協会の宗教教育認識
　第一節　国民協会の成立と公教育制度の展開
　第二節　1870 年基礎教育法の成立とその影響
　第三節　1870 年基礎教育法成立後の国民協会における宗教教育観

第二章　国教会聖職者の宗教教育認識：教区視学官による教区査察制度に注目して
　第一節　国教会聖職者による基礎教育への貢献
　第二節　教区視学官による宗教教育の評価
　第三節　その他の「担い手」たちが評価する宗教教育と教区査察

第三章　基礎学校教師の宗教教育認識
　第一節　クロス委員会の目的と宗教教育に関する調査内容
　第二節　教師の地位と境遇、聖職者との関係
　第三節　基礎学校における宗教教育の目的と内容

第四章　国民協会による宗教教育の目的と内容：国民協会の教育出版物に着目して
　第一節　『日曜、週日学校教師の為の宗教知識手引書』の概要および執筆者
　第二節　日曜学校において教師に求められる能力と資質
　第三節　宗教教育における体系的学習の模索
　第四節　宗教教育における暗記学習の重要性

第五章　基礎教育における非宗派主義の検討
　第一節　公教育制度のあり方めぐる宗派対立
　第二節　世俗科目としての道徳教育の教育目的と教授方法：『道徳科目の授業実例』

第六章　人々の宗教教育の経験
　第一節　両親が希求する宗教教育
　第二節　生徒たちによる宗教教育を巡る「小さな物語」

終章　研究の成果と今後の課題

史料、参考・引用文献

論文要約

序章　研究の目的と課題設定

本論文は、19 世紀末イングランドの基礎学校で実施された宗教教育を、教育の当事者たちの視点から分析することで、「世俗化」の過程と捉えられてきた近代イングランド公教育に対しての歴史的評価を再検討することを目的としている。

近代以前、民衆教育は聖書や教理問答等の宗教教育を中心として、教会から与えられるものであった。近代以降、国家から権利義務として受けるべき国民教育へと変化し、19 世紀ヨーロッパの諸国家は、国民国家形成の手段として公教育制度を発展させた。イングランドは、外国に遅れながらも公教育の整備を進め、19 世紀末に強制就学と無償教育を導入した。

このような経緯から、イングランドの 19 世紀は、国民教育制度が整備されていく公教育の漸進的な普及期として評価され、教育への国家介入は、「世俗化」の進展として位置づけられた（サイモン 1977）。特に 1870 年基礎教育法は、イングランドに初の地方教育行政制度を整備し、宗教教育を規制する条項が盛り込まれたことで、脱宗教的な意義が強く評価され、公教育制度の画期として位置づけられてきたとされる（村岡 2004, 142-143 頁）。

連動して、公教育における宗教教育や宗教の存在は、長らく否定的に理解されてきた。これは、教会や傘下の任意団体といった宗教勢力を、公教育の守旧の遺物、革新の妨害者としてこれまでの諸先行研究（Smith 2009, Robson 2002 など）が位置づけてきたことが指摘されている。次いで、教育制度史研究および教育政策史研究が明らかにしてきた諸成果は、結果的に宗教を、公教育制度と敵対する存在として描いてきた（大田 1992, 白石 1988）。

ただし、以上の研究動向から、イングランド公教育が 19 世紀末に「世俗化」したと位置づけるのは早計である。何故なら、宗教組織と関連する任意団体組織が、公教育制度の発展に重要な役割を担ったことは、大きな特徴として指摘されているからである。1833 年、国家が直接的な公教育への関与を開始した時、補助金供給の供給を担ったのは、イングランド国教会が組織する国民協会、非国教徒諸派が組織する内外学校協会という教育振興任意団体であった。1870 年に基礎教育法が制定された後も、宗教教育が公教育から完全に排除されたことはない。19 世紀末イングランドには、「公的」な基礎学校が二種類存在した。一つは、地方教育行政機関の学務委員会が管理した「学務委員会立学校」であり、もう一つは、任意団体組織が管理してきた「任意団体立学校」である。任意団体立学校と学務委員会立学校の大多数は、1870 年後も宗教教育を行い、国民教育に大きく関与していたのである。

更に、イングランド教育史研究の一方には、宗教勢力や任意団体の役割と存在を肯定的に評価してきた諸研究が存在している（Dew 1992, Green 1994, Martin 2013, 岩下 2011, 2012 年など）。こうしたもう一つの研究成果は、教育社会史的研究において、主にイングランド諸地域の事例を詳細に検討するミクロな視点による分析を行うことで、任意団体ならびに宗教の再評価をしてきた。

つまり、先行研究のイングランド公教育制度の成立・発展理解については、「世俗化」を

議論するにあたり宗教教育の評価を巡って、矛盾し乖離した言説と理解が併存している。この問題は、公教育に関する研究を牽引したのが、教育制度史および教育政策史研究であったことで、国家や教会という権力の対立構造に主軸を置く議論が進行してきたために生じたと考えられる。しかし、社会史的アプローチを採用する先行研究も、各地域の教育に関わる出来事や活動を発見した一方で、どう人々はそれを受け止めたのかという、「宗教教育の受容」に大きな関心を払わなかった。そのため、宗教の存在が社会にどう影響したのか不明となり、評価を二分してきたのである。問題脱却のため、支配的言説を取り払い、かつ、これまでの多様な宗教教育をもう一度見直していく必要がある。

そこで本論文は、複数の宗教教育の当事者に注目し、彼らが宗教教育をどのように捉え、認識し、解釈したのかを紐解く。それにより、宗教教育の受容についての課題に取り組み、宗教と世俗の関係性を相対化していく中で、その結果に基づいた宗教教育の新たな理解を提示する。これにより、宗教教育が当時の社会でどのようにみなされたのか、その諸相を描く。つまり、「近代化を達成するにつれて、宗教は衰退をしていく」という「大きな物語」に公教育の展開をあてはめた先行研究に対して、本研究は、宗教教育がどのように認識されていたのかを、人々の様々な事例から、「小さな物語」として抽出し、新たな歴史像を描くことを目指している。公教育における宗教教育の姿を個別具体的に浮かび上がらせ、当時の公教育制度における宗教と教育の関係、教育に対する教会と国家の役割や「世俗化」理解について新たな視座を提示する。

対象となるのは、イングランド国教会傘下の教育振興任意団体組織である国民協会と彼らが管理した国教会系基礎学校、そこでの教育の当事者たちである。本研究は、このような国教会系基礎学校に関わる当事者たちを中心にして「小さな物語」を描くことになる。国民協会は 19 世紀前半から国内に学校供給を行ってきたイングランド公教育の一翼であり、1870 年以降においても、管理する学校数および通学する生徒数は、国内の学校全体のおよそ半数を占めていた。国教会の教義を学ぶことを、当事者たちがどのようにみなしていたのか、国教会系基礎学校に注目することで改めて明らかにできると考える。

当事者たちの「小さな物語」を描くにあたり、本論文では第一に、先行研究で衰退と捉えられる宗教教育の動向を明らかにし、当時の宗教教育の捉え直しを図る。つまり、先行研究における宗教教育に対する評価の乖離を埋めるため、「世俗化」したとされる 19 世紀末において、宗教教育がどのような思惑の下に展開され、内容や目的、取り組みが具体的にどのように構想されたのか明らかにする。第二に、宗教教育の当事者たちがどのように宗教教育を捉えていたのか分析する。ここでは、当事者である「担い手」と「受け手」両者の視点から、彼らに映る宗教教育の諸相を明らかにする。教育の「担い手」たちには、教師はもちろんのこと、国教会聖職者も含まれる。聖職者についてはこれまで、公教育や教師の対立・阻害者とする研究と、学校で教育に貢献する聖職者の姿を描く研究の二つがあり、評価の分かれる存在であった。彼らが基礎学校に直接的に関わるのはなぜなのか。彼らの教育は公教育を妨害するものであったのか。この点を明らかにするため、本研究は聖職者を教育の「担い手」

として捉えることで、宗教教育を軸とした聖職者－教師関係の新たな側面を提示する。さらに注目するのは、これまで見落とされてきた教育の「受け手」、つまり生徒たちにとっての宗教教育の意味である。宗教教育の受容を巡り、教育を受けた人々の視点から、宗教教育が公教育に果たした役割について明らかにする。

これらを通して、宗教教育の役割を再評価すると共に、公教育における宗教の役割を改めて捉え直すことで公教育が「世俗化」したと理解される 19 世紀末イングランドの基礎学校の新たな姿を描き出す。このことの意義は、多様な信仰のあり方が認められつつある 19 世紀末のイングランド公教育において、宗教が教育を受けた人々にどのような影響を与えたのかという点から、宗教教育と国民教育の新たな関係性理解を提示することにある。

最後に、本論文が用いた史料を説明する。国民協会の宗教教育認識と戦略を明らかにするため、国民協会の年次報告書や定期刊行物及び教育出版物を使用した。加えて、19 世紀末の基礎教育法の状況を調査した王立調査委員会（クロス委員会）の報告書記録を用いる。これらを使用し、教育の当事者に注目をすることで、宗教教育に対する人々の認識を検討する。

あわせて、世俗的な道徳教育実践が行われたバーミンガム学務委員会を取り上げる。こちらでは、国民協会による宗教教育とは対照的に、宗教教育を公教育の枠組みから排除する動きがあり、その後には世俗科目として道徳教育が行われた。学務委員会の年次報告書や教材の検討を通じて、公教育における宗教教育の位置づけを反対派の認識から検討する。

そして、「受け手」の宗教教育経験を分析するため、19-20 世紀転換期にかけて、基礎教育に通学した人々が作成した回想録等の記録史料を参照する。これらから、宗教教育を通じて子どもたちが何を経験したのかを当事者の言葉を通して示すことを目指す。

第一章　国民協会の宗教教育認識

第一章では、教育の「担い手」による宗教教育認識と実践の検討に先立って、これまで等閑視されてきた国民協会の対学務委員会および宗教教育戦略を検討した。具体的には、国民協会と学務委員会制度について整理し、1870 年代に、国民協会の自己認識と対学務委員会認識がどのように構築されたのかその過程と要因を明らかにした。

1870 年基礎教育法は、国の補助金を受ける基礎学校において、宗派の教義や儀式を禁じるクーパー・テンプル条項や、親が子どもを宗教教育から退席させることを認める良心条項を規定した法律であった。特に、同法により発足した学務委員会、および彼らの下、設置される学務委員会立学校の登場は国民教育に大きな衝撃を与えた。学務委員会は宗教教育を非宗派的に行うことを原則とし、様々な教育的・財政的な権限が与えられたために、国民協会の学校管理と運営の脅威となった。

1870 年代の国民協会の年次報告書を確認すると、「非宗派と呼ばれる宗教の擁護者たちが熱心に提唱している、聖書を読むだけで宗教的な教授が成立するという誤った原則には同意することはできない」等、学務委員会制度や彼らの宗教教育について多くの批判と自己に対する危機意識を持っていた。イングランド国内の民衆教育を牽引してきた国民協会にと

って、基礎教育法の制定、学務委員会制度の発足は、権限、機能、財政等様々な面で、大きな障害となった。その中で自己の正当性の材料として用いられたのが宗教教育であり、国民協会は、宗教教育を新たな公教育制度を批判する論点とした。

結果的に、学務委員会制度が廃止されるまでの約 30 年、国民協会は学校数で、学務委員会を下回ることはなく、基礎教育の一翼を担い続けた。国民協会は 70 年代末「全国の教会学校〔国教会系基礎学校：発表者注〕は、9 年前よりも総じて強い立場にある」と記したように、民衆が宗教教育を必要としていることを確信し、1880 年代からの国民協会の公教育戦略の中で、「宗教教育が公教育において不可欠である」とする姿勢を強固にしていった。

第二章　国教会聖職者の宗教教育認識：教区視学官による教区査察制度に注目して

第二章では、国教会聖職者に注目することで、彼らの学校における宗教教育の評価と、聖職者自身の教師についての認識を明らかにした。本章が注目したのは、教区視学官の任に就く国教会聖職者である。彼らは、国民協会により国教会系基礎学校に派遣され、宗教教育の査察・試験を実施した。彼らによる査察報告は、国民協会の宗教教育認識の根拠となった。

報告された査察結果を確認すると、基礎学校での宗教教育が 20 年間で向上していることが読み取れる。基礎学校での宗教教育評価は、高、中、低の三段階評価で報告されており、年代を経るにつれて高評価の学校割合が増加し、中・低評価の学校割合は低下する傾向にある。全体割合は、1874 年の調査段階で高評価が 41.7%、中評価が 46.9%、低評価が 11.4%となっていた。1894 年には、高評価 76.7%、中評価 20.7%、低評価が 2.5%へと変化しており、全体の約四分の三の学校では、高評価の判断が下された。（次頁の表グラフ参照）

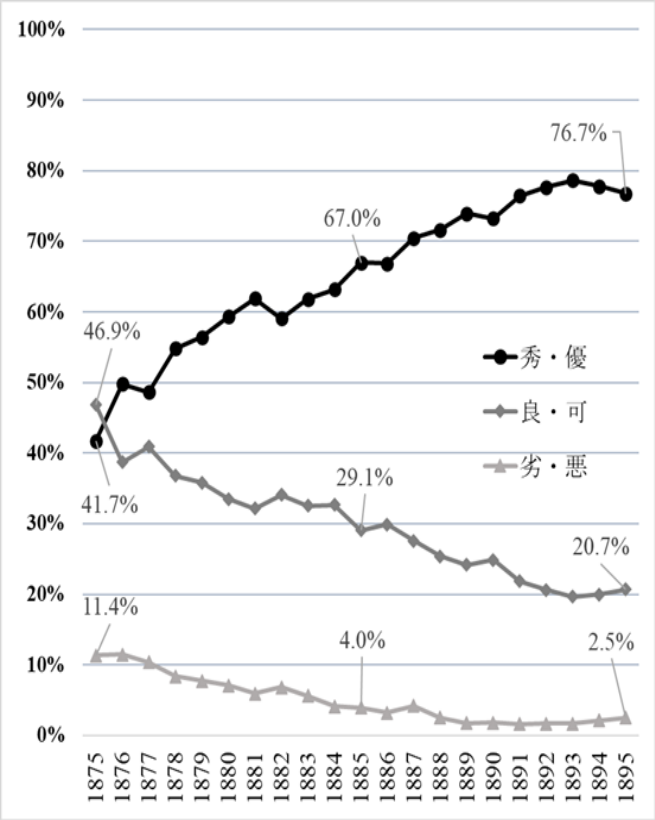
また、国民協会の年次報告書には、各地の宗教教育の状況と、教師の宗教教育に取り組む態度について、教区視学官の報告が記載された。オックスフォードの教区視学官は、1880 年代に宗教教育が改善されていく様子を報告した。そこには「教師たちが習慣として私の提案を取り入れ、悪いと指摘された部分を改善しようとする姿勢を見せてくれることは、私の仕事の中で最も励みになることの一つである」と宗教教育に貢献する教師の姿が記された。

教区視学官は、基礎学校において宗教教育が維持・向上し、宗教教育が必要とされていることを報告し、国民協会が主張する宗教教育の重要性を裏付ける重要な根拠を提供した。同時に、教師の努力や協力的な態度を高く評価しており、教師を宗教教育の改善に熱心な、宗教教育の協力者として描き、宗教教育の重要な担い手として描いていた。

一方で、教区視学官による教区査察の課題については、他の教育の「担い手」たちからの証言から明らかとなった。彼らは、教区視学官による査察の課題を自らの宗教教育観から述べた。しかしながら、彼らの意見は教区視学官の査察が、国教会系基礎学校での宗教教育に大きな影響与えていたことを示している。また 70 年代以降、より意義のある宗教教育を実行・評価するにはどうすればよいかという点が議論の焦点となったと思われる。

表グラフ：教区視学官による教区査察の統計と評価の変化

発行年	宗教教育の評価（校）				
	優・秀	良・可	劣・悪	計	
1875	4,403	4,956	1,203	10,562	※
1876	5,647	4,396	1,302	11,345	
1877	5,599	4,709	1,199	11,507	
1878	7,157	4,804	1,098	13,059	
1879	7,578	4,813	1,042	13,433	
1880	8,052	4,548	968	13,568	
1881	8,305	4,314	801	13,420	
1882	8,419	4,857	973	14,249	
1883	9,069	4,768	823	14,660	
1884	8,562	4,430	564	13,556	
1885	9,845	4,272	583	14,700	
1886	9,756	4,362	474	14,592	※
1887	9,556	3,738	573	13,567	※
1888	10,311	3,657	365	14,402	※
1889	10,969	3,581	264	14,834	
1890	11,005	3,740	271	15,025	
1891	10,980	3,142	239	14,361	※
1892	9,788	2,604	214	12,606	
1893	10,911	2,725	238	13,874	※
1894	11,158	2,867	312	14,337	
1895	11,300	3,050	375	14,725	※



・教区視学官による教区査察は、年次報告書が発行された年の前年に実施されている。

・また、「※」のついた年は、対象年度の前年に調査した基礎学校の結果が含まれている。

出典：*Annual Report of the National Society for Promoting the Education of the poor in the Principles of the Established Church throughout England and Wales*, 64th-84th, 1875-1895, Church of England Record Centre, NS/3/1/19-26 をもとに作成。

第三章　基礎学校教師の宗教教育認識

第三章では、教師が宗教教育をどのように認識していたのかについて、彼らによる証言を中心に、基礎学校における宗教教育の事例と彼らの宗教教育観を検討した。本章の意義は、教師と聖職者の関係を分析する上で、先行研究が等閑視してきた教師から見た聖職者像や宗教教育を行う目的・意義を明らかとしたことである。

19 世紀、国教会系基礎学校の教師にとって聖職者との関わりは必須であり、聖職者は学校において重要な役割を担っていた。教師の各証言を確認すると、聖職者が学校の授業を直接行っていないのは、都市部近郊の学校のみで、農村地域や小規模の学校では聖職者が直接授業を行っていた。ある教師が、「教区代理牧師が上級生の〔宗教教育の〕授業を担当し、私は下級生を担当していました。私がそこに勤めた最初の頃から、彼は毎朝来てくださり、他の教区を任されるまで来てくださっていました。彼は最も規則的な人でした」と答えたように、聖職者は基礎学校やそこでの宗教教育に大きな影響を与えていた。

また教師の証言は、宗教教育の内容と、彼ら自身の宗教教育観を示していた。国教会系基礎学校の教師は、宗教の授業を毎朝、1 時間程度実施しており、自らの宗教教育に使命感を見出していた。ある教師は、「宗教教育は他のすべて〔の教育〕とは異なり、私に子どもたちに対しての確かな立場を与えています」と、宗教教育を特別な科目と捉えており、重要な意味や意義があることを述べた。ただし、彼らの宗教教育が国教会の教義や儀礼を教えることに偏重していた訳ではない。「それ〔宗教教育〕を教える義務があるが、生徒はそれを受け止める義務はない」と職務として宗教教育を行うという立場を説明する教師もいれば、「教理問答の中で万人に受け入れられる部分を取り上げ、疑わしい部分は避けています」と宗派間で矛盾する教義を教えない教師もいた。教師たちは、基礎教育法の各条項を理解した上で、自身の価値観や思想の下、柔軟に宗教教育を行うべきと考えていた。

国教会系基礎学校で働く教師の宗教教育についての考え方は様々であるものの、宗教を教えることを通して生徒に道徳的人格を形成させ、彼らの教育に責任を持つことが教師の役割であると考えていた。そのために彼らは、聖職者と協力し宗教教育を行っていた。

教師に多様な考え方があったことを踏まえると、聖職者との「協力関係」は一筋縄ではいかないものであっただろう。しかしながら、両者が交渉を決裂せずに、学校において協力をしたのは生徒の教育という共通の目的とお互いへの信頼があったためだと思われる。

第四章　国民協会による宗教教育の目的と内容：国民協会の教育出版物に着目して

第四章では、国民協会と「担い手」の宗教教育認識が、どのような宗教教育の理想の下で構築されたのか、宗教教育の目的と内容を検討した。そこで、国民協会が、何のために宗教教育を行うべきと考え、生徒に何を教え、教師に何を求めたのか、彼らが出版した「日曜、平日学校教師の為の宗教知識手引書」シリーズ五冊（1881-1882 年）をもとに検討した。

同シリーズが教師に説く教育目的は、「子どもたちを敬虔な崇拝者として教会の一員となるように訓練すること」であり、宗教教育では、宗教的知識よりも信仰心や道徳等の宗教的

情操の会得が重視された。そのために五冊の手引書は二通りの教育を構想している。一つ目は、聖書が記す体系的な歴史を生徒に関心を持たせ理解させることである。その過程で重視されたのは、子どもの興味に基づいた教育の工夫であった。例えば、『新約聖書教授法』では、絵や地図等の教具を授業で用いることや、「会話形式で話を進めていき、質問を与えることで物語を紐解いていきましょう」等、授業の具体例が示され、生徒の学習段階に沿った内容や教育方法が言及されている。二つ目は、教理問答と祈祷書の暗記による繰り返しにより、宗教的心情を体得させることであった。教理問答や祈祷書の教授法では、暗記という学習の本質について説明が行われている。『教理問答教授法』において「宗教教育においては、最も本質的な真理が正確に具現化され、容易に記憶されることを認めるような形で表現された健全な言葉の形というものが必要となる」、「単なる口頭での知識というものは、〔中略〕神学においても価値がない」と示されるように、暗記学習においても、国民協会は知識の習得ではなく宗教的素養の育成を重視した。機械的な知識の学習ではなく、教会の教えの反復によって宗教的情操を養わせるという宗教教育のあり方を教師に理解してもらうことが目指されていた。

第五章　基礎教育における非宗派主義の検討

第五章では、世俗的な道徳教育の検討を通じて、教育の世俗化を推進した人々がどのような教育の論理と内容を構築していたのかを明らかにした。それにより、これまで先行研究が進歩と衰退で対比的に捉えられてきた世俗的な道徳教育と宗教教育の関係について、両者の比較と通して、双方の影響を踏まえた相互発展的な関係であったことを指摘した。

国民協会が宗教教育のあり方を模索した一方、イングランドの一部地域では、世俗的な道徳教育のあり方が模索された。バーミンガムは世俗的な道徳教育を公教育制度の中で行った地域であり、そこでの実践はイングランド全体の基礎教育に影響を与えた。実際、基礎教育を調査したクロス委員会内の議論でも、基礎教育の世俗化の推進者であった非国教徒・自由派閥は、同地域の実践を意見の根拠の一つとした。彼らは、道徳教育自体を重視することで、宗教と道徳の切り分けを行うことを主張した。性格の形成に必要なのは宗教的要素ではなく、普遍的な道徳的価値観であり、それを育むための教育が現場の管理者や教師によって行われることが必要と考えたのである。

世俗科目としての道徳教育について、どのような道徳教育の論理や内容がバーミンガムで構想されたのか分析するにあたって、『道徳科目の授業実例』（1883 年）を分析した。

『授業実例』では、学習する道徳的徳目が 40 テーマ用意され、徳目を学ぶことを「あらゆる真の高潔さを備えた性格の基礎を形成しなければならないという偉大な道徳的真理を、実際の人間的な関心をもって実現しようとする真剣な試み」と位置づけた。つまり、究極的な教育の目的は「子どもの性格の形成」であり、世俗科目としての道徳教育は、徳目の教授を通じて、子どもを高潔な性格を備えた人間にすることを理想とした。

さらに基礎教育の世俗化を推進する人々は、国家が要求した、国民が備えるべき道徳的徳

目を子どもたちに効率的に、それも宗教に頼らずに獲得させることを模索した。実際、『授業実例』の授業は宗教的要素を意図的に排除していた。つまり世俗的な道徳教育は、体系化を図る上で、宗教教育からの脱却や対立を自身の有益性の論理に組み込んでおり、宗教教育の存在を強く意識し続けていた。

第六章　人々の宗教教育の経験

第六章では、教育の「受け手」に注目することで、民衆と宗教教育についての理解を捉え直し、人々が宗教教育を受けたことを、どのように認識し、記憶しているのかという宗教教育の新たな位置づけを試みた。具体的には、19-20 世紀転換期、基礎学校に通学した生徒と彼らの親による基礎教育についての証言と回想の分析を行った。

親たちの証言は、当時のロンドンにおける任意団体立学校と、学務委員会立学校についての印象、および学校で子どもに宗教教育を受けさせることについての考え方を示していた。証言は、親たちが労働者階級の誰を代表しているのかで見解が異なっており、それは基礎学校での宗教教育に求めるものに影響を与えていた。

国教会系基礎学校に通学した人々の回想は、彼らが語る当時の様々な宗教教育の様子とそれに対する認識のあり方を示していた。分析では、彼らが学校や生活の中で受けてきた宗教教育をどのように捉えたのか整理するため、「生徒からみた聖職者」、「生徒の受けた宗教教育」、「宗教教育の知識や教えをどう受け止めたのか」という三点に注目した。

特に「宗教教育の知識や教えをどう受け止めたのか」については、複数の生徒から宗教教育や学校での教育が、結果的に彼らの宗教観に影響を与えた事例を見つけることができた。トムソンは、教区視学官を感嘆させる作文を書いた。ブラックバーンは、国教会系基礎学校で宗教教育を受けたことで、キリスト教の知識や内容が自身の文学的な関心を一層深め、自身のリテラシーを高める契機となった。グレスウェルは、ある教師から受けた教育全般を自らの価値観を変えた重要な経験とみなしていた。その中で、教師から受けた音楽教育は、後に、讃美歌の伴奏という形で信仰生活の一場面で活かされた。

本章は、これまで先行研究が描いてこなかった宗教教育を経験した人々の、教育と信仰についての認識・価値観・態度の一端を明らかにした。彼らの「物語」は、基礎学校での教育が人々の信仰とどう関係するのかを示しており、宗教や信仰の実践についての様々な日常的感覚や態度を表していた。

終章　研究の成果と今後の課題

本論文は、19 世紀末イングランドにおける国教会系基礎学校での宗教教育が、教育の当事者たちからどのように認識されていたのかを検討することで、近代公教育の中に宗教教育を再度、位置づけ直すことを目指した。本論文は、以下の三点を成果として挙げる。

一つ目は、教育の「担い手」たちの宗教教育認識と教育内容、および彼らの間に生じた様々な関係性を明らかにしたことである。聖職者と教師の言説は、彼らが、従来指摘されてきた

ような「敵対的な対立関係」に必ずしも置かれていたわけではないことを明らかとした。宗教教育に関して、双方がお互いを評価していることは数々の証言記録から確認できる。一方、宗教教育のある場面では、認識や価値観の相違から「担い手」たちの考えが衝突している様子も確認した。しかし、両者は宗教教育を提供することには肯定しており、どのようにすれば、よい宗教教育を提供できるのかを巡り試行錯誤をしていたと考えられる。つまり、教育の「担い手」の聖職者と教師は、常に「敵対的な対立関係」にあったのではない。彼らは宗教教育について、その価値観に相違はあれども、生徒の人格形成に必要だとする利害の一致から協力と協議を繰り返したのである。

二つ目の成果は、宗教教育と「世俗化」を目指す道徳教育にどのような違いがあるのかを明らかにしたことである。これにより、「宗教か世俗か」という両極に立つ理論を比較し、両者の関係と影響を明らかにすることができた。19 世紀末、双方の教育動向は、お互いが共に注目を向け意識をしていた。国民協会が目指した宗教教育は、いかに信仰を内面化させるかを志向しており、宗教教育の実践例に加えて、何故宗教を学ぶべきなのかという点が強く協調されていた。バーミンガム学務委員会が目指していたのは、国家の要求する道徳をいかに獲得させるのかという効率性であり、道徳教育の有用性を示すことで既存の宗教に基づく教育に対抗しようとしていた。このように両者の教育に注目すると、どちらかが革新的で新しく、どちらかが守旧の遺物という単純な構図で分けることのできない、当時の公教育の動的な様相が示されていた。

三つ目は、基礎学校での宗教教育を複数の視点から捉え直す中で、「受け手」の宗教教育の経験を「小さな物語」として新たに提示したことである。国教会系基礎学校での宗教教育は、敬虔な人物にとって、後の人生を豊かにする契機となった。一方、そうでない人物にとって、宗教教育は日常的で退屈なものに過ぎなかったが、退屈と記憶される宗教教育に何も意味がなかったのかと言えばそうではなかった。こうした多様な宗教教育の記憶からは、彼らが宗教教育の価値を認めた多様な理由を導き出すことができた。信仰から完全に切り離された価値観が 19 世紀末の公教育制度の変化を境に普及したとする従来の公教育の世俗化理解とは異なる状況がそこにはあった。

これらの成果から導き出せる、イングランドの公教育における「世俗化」とは何か、また近代公教育における宗教教育とはどのような存在なのかについて以下、論じる。これまで、先行研究で議論されてきたイングランド公教育の「世俗化」は、宗教教育の衰退という理解から導き出されてきた。しかし、宗教教育の重要性は、教育の担い手によって強く意識され、熱心に実施された。だからこそ、宗教教育とそれに対抗する新たな教育は、両者ともその論理と教育方法を研鑽・発展させた。宗教教育に価値を見出す親や生徒もおり、宗教教育の衰退という言説では捉えることのできない、社会や人生を構成する重要な要素としての宗教教育の姿が存在していたのである。

宗教や信仰は、国家や教会組織の思惑、教会や学校といった場所、あるいは聖職者や教師の認識とは異なる次元で理解され、受容された。分析の対象には、非国教徒の家庭に育ち、

国教会系基礎学校で宗教教育を受けた人々もいる。彼らの親にとって、宗教教育を受けさせることは、望ましくないことであったのかもしれない。しかし、当人にとって宗教教育は世俗科目と同様、日常的な学習の一つとして受け止められていた様子を複数確認することができた。このような姿は、これまで宗教教育を「是」か「非」かで、議論してきた先行研究が見落としてきた人々の宗教教育の受容の有様であった。

宗教教育、あるいは信仰に対する人々の認識には、宗教教育を受容する姿勢についても幾千もの階調が存在している。そうならば、学校という空間を軸にして教育が「世俗化」することを測ることは不可能なことを認めざるを得ない。

本研究が改めて指摘するのは、宗教教育の一般性である。つまり、宗教教育は当時のイングランド社会においてこれまで想定されてきた程、特殊なものではないということである。宗教教育は、公教育の中で「担い手」によって、特別なものと位置づけられた科目ではある。しかし教育の「受け手」に目を向けた時、こうした特別な科目であるという「担い手」の期待がどこまで伝わっていたのかは判然としない。彼らにとって、宗教教育とは、学校生活の日常における一場面に過ぎず、良くも悪くも、他の科目と大差がないものであった。

史料、参考・引用文献

【未刊行一次史料】

〈国民協会年次報告書関連〉

・National Society, *Annual Report of the National Society for Promoting the Education of the poor in the Principles of the Established Church throughout England and Wales*, 59th-92nd, 1870-1903, Church of England Record Centre, NS/3/1/20- NS/3/1/28.

・National Society, *A Catalogue of Educational Works for the Use of Teachers and Scholars and for Students and for Students in Training College*, London, 1898-1903, Church of England Record Centre, NS/3/1/27- NS/3/1/28.

〈クロス委員会報告書〉

・*First report of the Royal Commission appointed to inquire into the Working of the Elementary Education Acts*, England and Wales, 1886, 19th & 20th House of Commons Parliamentary Papers (Database), C. 4863.

・*Second report of the Royal Commission appointed to inquire into the Working of the Elementary Education Acts*, England and Wales, 1887, 19th & 20th House of Commons Parliamentary Papers (Database), C. 5056.

・*Third report of the Royal Commission appointed to inquire into the Working of the Elementary Education Acts,* England and Wales, 1887, 19th & 20th House of Commons Parliamentary Papers (Database), C. 5158.

・*Final report of the Commissioners appointed to inquire into the Elementary Education Acts*, England

and Wales, 1888, 19th & 20th House of Commons Parliamentary Papers (Database), C. 5485-IV.

〈バーミンガム学務委員会年次報告書〉

・Birmingham School Board, *Report shewing* (sic) *the work accomplished by the Board during the six years ended November 28th, 1876*, Birmingham, 1876, 国立国会図書館関西館所蔵、258.9-B53.

・Birmingham School Board, *Report showing the work accomplished by the Board during the year ended November 28th, 1877*, Birmingham, 1877, 国立国会図書館関西館所蔵、258.9-B53.

・Birmingham School Board, *Report showing the work accomplished by the Board during the year ended November 28th, 1878*, Birmingham, 1878, 国立国会図書館関西館所蔵、258.9-B53.

・Birmingham School Board, *Report showing the work accomplished by the Board during the year ended November 28th, 1879*, Birmingham, 1879, 国立国会図書館関西館所蔵、258.9-B53.

・Birmingham School Board, *Report showing the work accomplished by the Board during the year ended November 28th, 1880*, Birmingham, 1880, 国立国会図書館関西館所蔵、258.9-B53.

〈バーネット・アーカイブ（労働者階級自伝史料）〉

・Anderson, J. R., *Vapourings of an old ploughman: memoirs of 1892-1914*, 1973, Brunel University, Burnett Archive, 1:1016.

・Davies, Mary, *Reminiscences of Aldrington Church of England School, Hove, 1983*, Brunel University, Burnett Archive, 2:1042.

・Elisdon, L. W., *Starting from Victoria*, 1958, Brunel University, Burnett Archive, 1:229.

・Fowler, Hilda, *Look After the Little Ones*, 1976, Brunel University, Burnett Archive, 1:243

〈その他未刊行一次史料〉

・*Education Department. 1877. New code of regulations with an appendix of new articles and of all articles modified, by the Right Honourable the Loads of the committee of the Privy Council on Education.*, 1877, House of Commons Parliamentary Papers (Database), C.1667.

・*Education. England and Wales. Circular to Her Majesty's Inspectors.*, 1878/1/16, House of Commons Parliamentary Papers (Database), C.1964.

【定期刊行物】

・National Society, *The School guardian: an educational newspaper and review*, London, Vol. 1-27, 1876-1902, 早稲田大学所蔵, 370.5 Sc62.

【刊行一次史料・パンフレット】

〈Religious Knowledge Manuals for Sunday and Day-School Teachers シリーズ〉

・Yonge, Charlotte Mary, *Practical work in Sunday Schools*, London, 1881a.
・Benham, William, *How to teach the Old Testament*, London, 1881.
・Yonge, Charlotte Mary, *How to teach the New Testament*, London, 1881b.
・Daniel, Evan, *How to teach the church catechism*, London, 1882a.
・Daniel, Evan, *How to teach the Prayer Book,* London, 1882b.

〈刊行自伝史料等〉
・Blackburn, Elizabeth Knibb, *In and out the windows: a story of the changes in working class life 1902-1977 in a small East Lancashire community*, Burnley, 1979.
・Gresswell, Fred, *Bright Boots* (1st. pub., 1956), Hale, 1982.
・Thompson, Flora, *Lark Rise to Candleford* (1st. pub., 1939), London, 1954〔石田英子訳『ラークライズ』朔北社、2008 年〕

〈バーミンガム学務委員会関連教師用手引書〉
・Hackwood, Frederick William, *Notes of Lessons on Moral Subjects A Handbook for Teachers in Elementary Schools*, London, 1883.

〈新聞記事〉
・*Lichfield Mercury Friday*, Staffordshire, 10 December 1926, British Newspaper Archive (Database).
・*Tamworth Herald*, Staffordshire, Saturday 11 December 1926, British Newspaper Archive (Database).

〈その他刊行一次史料・パンフレット〉
・Adler, Hermann Nathan, *The cry of our Board School children*, London, December 1st, 1894.
・Goldsmith, Oliver, *The deserted village, a poem*, London, 1770.

【人名事典】
・Matthew, H. C. G. and Harrison, Brian eds., *Oxford Dictionary of National Biography: in association with the British Academy: from the earliest times to the year 2000*, Oxford, 2004.

【欧文文献】
・Adamson, John William, *English education, 1789-1902*, Cambridge, 1964.
・Arthur, James, 'Christianity and the character education movement 1897-1914', *History of Education*, vol. 48(1), 2019.
・Bartle, George F., ‘The Teaching Manuals and Lesson Books of The British and Foreign School Society’, *History of Education Society Bulletin*, vol. 46, 1990.

・Brown, Callum G., *The Death of Christian Britain*, London, 2001.
・CLARK, J. C. D., ‘Secularization and Modernization: The Failure of a ‘Grand Narrative’’ *The Historical Journal*, vol. 55(1), 2012.
・Cruickshank, Marjorie, *Church and state in English education: 1870 to the present day*, London, 1963.
・Dew, Barbara, ‘The clergy and the village school: the role of the clergyman in Church of England schools in Oxfordshire villages, 1860-1902’, History of Education Society Bulletin, vol. 49, 1992.
・Dew, Barbara, ‘A local inspectorate and advisory service?: the work of the diocesan inspector and the organising master in Church of England elementary schools in north Oxfordshire, 1850-1901’, *History of Education Society Bulletin*, vol. 52, 1993.
・Edmonds, E. L., *The School Inspector*, London, 1962.
・Graham, Malcolm, *Oxfordshire at School*, Stroud, 1996.
・Green, Andy, *Education and State Formation: the Rise of Educational Systems in England, France and the USA*, Basingstoke, 1990.
・Green, Joyce, ‘The Anglican Clergy and the Village School: Variations in Initiative and Enthusiasm in Shropshire Schools during the Nineteenth Century’, *History of Education Society Bulletin*, vol. 53, 1994.
・Horn, Pamela, *Education in Rural England 1800-1914*, London, 1978.
・Jacob, W. M., *The Clerical Profession: ln the Long Eighteenth Century 1680-1840*, New York, 2007,
・Jacob, W. M., *Religious Vitality in Victorian London*, Oxford, 2021.
・Louden, M. R. Lois, ‘The conscience clause in religious education and collective worship: conscientious objection or curriculum choice?’, *British Journal of Religious Education*, vol. 26(3), 2004.
・Martin, Mary Clare, ‘Church, school and locality: Revisiting the historiography of "state" and "religious" educational infrastructures in England and Wales, 1780-1870’, *Paedagogica Historica*, vol. 49(1), 2013.
・Murphy, James, *Church, State and School Britain, 1800-1970*, London, 1971.
・Murray, Patrick, ‘The Riddle of Goldsmith's Ancestry’, *An Irish Quarterly Review*, vol. 63(250), Summer, 1974.
・Morris, Jeremy, ‘Secularization and Religious Experience: Arguments in the Historiography of Modern British Religion’, *The Historical Journal*, vol. 55(1), 2012.
・Nash, David S., ‘Believing in Secularisation-Stories of Decline, Potential, and Resurgence’ *Journal of Religious History*, vol. 41(4), 2017.
・Nettleship, Richard Lewis, ed., *Works of Thomas Hill Green*, vol. III, London, 1888〔グリーン, トーマス・ヒル著、松井一麿、浅野博夫、宮腰英一、大桃敏行訳『イギリス教育制度論』お茶の水書房、1983 年〕

・Northcote, Vivien Hornby, The use of Christian imagery by the National Society of the Church of England in Religious Education materials from 1884 until the early twentieth century, PhD. thesis of University of Warwick, 2004.
・Northcote, Vivien Hornby, *The Use of Italian Renaissance Art in Victorian Religious Education: How the National Society Shaped Our Modern Idea of Christ*, New York, 2010.
・Phillips, Trevor, 'HM Inspectorate of Schools and the National Union of Elementary Teachers: a study of their relations, 1870-82', *Journal of Educational Administration and History*, vol. 26(1), 1994.
・Olney, Richard John, *Lincolnshire politics*, 1832-1885, London, 1973.
・Rectenwald, Michael, *Nineteenth-century British secularism: science, religion and literature*, Hampshire, 2016.
・Richards, N. J., 'Religious Controversy and the School Boards 1870-1902', *British Journal of Educational Studies*, vol. 18(2), 1970.
・Roberts, Robert, *The Classic Slum Salford Life in the First Quarter of the Century*, Manchester, 1971.
・Robson, Geoff, 'The churches, the Bible and the child: Sir Joshua Fitch and religious education in the English elementary school, 1860-1902', *History of Education Society Bulletin*, vol. 69, 2002.
・Rose, Jonathan, *The Intellectual Life of the British Working Classes*, New Haven, 2001.
・Seaborne, Malcolm and Ischam, Gyles, 'A Victorian Schoolmaster: John James Greaves, Part Two', *Northamptonshire Past & Present*, vol. 4(2), 1967-68.
・Smith, John, T., *A Victorian Class Conflict? Schoolteaching and the Parson, Priest and Minister, 1837-1902*, Brighton, 2009.
・Sutherland, Gillian, *Policy-Making in Elementary Education 1870-1895*, London, 1973.
・Tholfsen, T. R., 'Moral Education in the Victorian Sunday School', *History of Education Quarterly*, vol.20, 1980
・Wright, Susannah, 'The Struggle for Moral Education in English Elementary Schools 1879-1918', PhD. thesis of Oxford Brookes University, 2006.
・Wright, Susannah, 'Into Unfamiliar Territory? The Moral Instruction Curriculum in English Elementary Schools 1880-1914', *History of Educational Researcher*, 79, 2007.

【邦文文献】

・アークル，V．T．J．著、松村昌家、森道子、新野緑、島津展子訳『イギリスの社会と文化 200 年の歩み』英宝社、2002 年。
・井野瀬久美惠『イギリス文化史』昭和堂、2010 年。
・今井宏編『世界歴史大系 イギリス史 2 近世』山川出版社、1990 年。
・岩下誠「ヴォランタリズムと公教育：近代イングランドにおける民衆教育の構造転換に関

する社会史的研究」東京大学博士論文、2011 年。
・岩下誠「イングランド公教育史のなかのヴォランタリズム：研究成果の総括と展望」『日英教育研究フォーラム』15 号、2012 年。
・ヴィンセント，デイヴィド著、川北稔、松浦京子訳『パンと知識と解放と：19 世紀イギリス労働者階級の自叙伝を読む』岩波書店、1991 年。
・ヴィンセント，デイヴィド著、北本正章監訳『マス・リテラシーの時代』新曜社、2011 年。
・ウォードル，D．著、岩本俊郎訳『イギリス民衆教育の展開』共同出版、1979 年。
・大門正克『民衆の教育経験：都市と農村の子ども』青木書店、2000 年。
・大田直子『イギリス教育行政制度成立史：パートナーシップ原理の誕生』東京大学出版会、1992 年。
・オールティック，R．D．著　要田圭治、大嶋浩、田中孝信訳『ヴィクトリア朝の人と思想』音羽書房鶴見書店、1998 年。
・大門正克『民衆の教育経験：都市と農村の子ども』青木書店、2000 年。
・小嶋潤『イギリス教会史』刀水書房、1988 年。
・オルドリッチ，リチャード著、松塚俊三、安原義仁監訳『イギリスの教育：歴史との対話』玉川大学出版部、2001 年。
・オルドリッチ，リチャード著、本多みどり訳『イギリス・ヴィクトリア期の学校と社会：ジョセフ・ペインと教育の新世界』ふくろう出版、2013 年。
・教育史学会編『教育史研究の最前線』日本図書センター、2007 年。
・髙妻紳二郎『イギリス視学官制度に関する研究：第三者による学校評価の伝統と革新』多賀出版、2007 年。
・近藤和彦編『イギリス史研究入門』山川出版社、2010 年。
・サイモン，ブライアン著、成田克矢訳『イギリス教育史I』亜紀書房、1977 年。
・榊原浩晃「『クロス委員会報告書（1886-88）』の体育史的再評価：19 世紀末イギリス初等教育への体育授業導入をめぐって」『福岡教育大学紀要第 5 分冊芸術・保健体育・家政科編』(47)、1998 年。
・柴沼晶子「公教育における宗教教育：その制度的位置づけをめぐって」『敬和学園大学研究紀要』(14)、2005 年。
・柴沼晶子、新井浅浩編著『現代英国の宗教教育と人格教育（PSE）』東信堂、2001 年。
・白石晃一「19 世紀イギリスの初等教育における宗派主義と非宗派主義の問題：1870 年初等教育法の良心条項をてがかりにしてー」『筑波大学教育学系論集』12(2)、1988 年。
・白石晃一「19 世紀前半期イングランドにおける宗教活動と日曜学校の状況：1851 年人口調査によって」『筑波大学教育学系論集』15(2)、1991 年。
・田口仁久『イギリス学校教育史』学芸図書株式会社、1975 年。
・伊達聖伸『ライシテ、道徳、宗教学：もうひとつの一九世紀フランス宗教史』勁草書房、2010 年。

・伊達聖伸編『ヨーロッパの世俗と宗教』勁草書房、2020 年。
・鶴見良次「「新約聖書が完璧に読めること」18 世紀イギリスにおける初等リーディング教育の達成目標」『成城文藝』(207)、2009 年。
・鶴見良次「イギリス慈善学校のリテラリー・カリキュラム：ジェイムズ・トールボットの教師用手引書『クリスチャン教師』(1707)」『成城大学社会イノベーション研究』8(2)、2013 年。
・テイラー，チャールズ著、千葉眞監訳、木部尚志、山岡龍一、遠藤知子訳『世俗の時代（上下巻）』名古屋大学出版、2020 年。
・寺崎弘昭『イギリス学校体罰史：「イーストボーンの悲劇」とロック的構図』東京大学出版会、2001 年。
・中野智世、前田更子、渡邊千秋、尾崎修治編著近代ヨーロッパとキリスト教：カトリシズムの社会史」勁草書房、2016 年。
・中野智世、前田更子、渡邊千秋、尾崎修治編著『カトリシズムと信仰世界：信仰の近代ヨーロッパ史』勁草書房、2023 年。
・成田克矢『イギリス教育政策史研究』御茶の水書房、1966 年。
・長谷川貴彦編『現代歴史学の展望』岩波書店、2016 年。
・長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』岩波書店、2020 年。
・ハンフリーズ，スティーヴン著、山田潤、ビリングズリー，P.、呉宏明監訳『大英帝国の子どもたち：聞き取りによる非行と抵抗の社会史』柘植書房、1990 年。
・ハンフリーズ，ジェーン著、原伸子（ほか）訳『イギリス産業革命期の子どもと労働：労働者の自伝から』法政大学出版局、2022 年。
・藤原聖子『ポスト多文化主義が描く宗教：イギリス〈共同体の結束〉政策の功罪』岩波書店、2017 年。
・舟川一彦『十九世紀オックスフォード』信山社、2000 年。
・松塚俊三『歴史の中の教師：近代イギリスの国家と民衆文化』山川出版社、2001 年。
・松塚俊三「イギリス労働者階級の自伝と独学の文化」『日英教育フォーラム』24 号、2020 年。
・松塚俊三、安原義仁編『叢書・比較教育社会史　国家・共同体・教師の戦略：教師の比較社会史』昭和堂、2006 年。
・三好信浩『イギリス公教育の歴史的構造』亜紀書房、1968 年。
・ムアマン，J. R. H. 著、八代崇、中村茂、佐藤哲典訳『イギリス教会史』聖公会出版、1991 年。
・村岡健二「近代イギリス民衆教育史の再検討」『教育学年報 10 教育学の最前線』世織書房、2004 年。
・森洋子「ホガースの"描かれた道徳"：当世風七つの罪源について」『美学』34(4)、1984 年。
・森川泉『イギリス学校教育制度の展開と構造：1870-1902』広島修道大学総合研究所、1983

年。
・安原義仁『イギリス大学史：中世から現代まで』昭和堂、2021 年。
・山中弘「世俗化論とイギリス宗教史」『哲学・思想論集』(27)、2001 年。
・吉井紀子「シャーロット・メアリ・ヤング　児童文学と宗教教育のはざまで」ニュー・ファンタジーの会『イギリス女流児童文学作家の系譜 2　ひなぎくの首飾り』透土社、1992 年。
・ロースン，ジョン、シルバー，ハロルド著、北斗・研究サークル訳『イギリス教育社会史』学文社、2007 年。